

〈東京都路下現況報告〉

・地下変異体質

光がほとんど届かない暗渠にあって、チカンチュの眼球は特異な進化を果たした。それはメガネザル（夜行性）の眼球と限りなく酷似しており、わずかな光を十分に取り込めるような構造になっている。一方で調光の役割を担う虹彩を失っているため強い光に耐えることができない。聴覚への依存度が高く、耳翼は地上人より1割ほど大きい。また、暗渠内は一年を通して気温の変化が少ないため、体毛はほとんど失われている。日光に当たることがないため、ビタミンDの生成及びカルシウムの吸収が心配されるが、魚を主食とすることでこの点は解決されていると言われる。食用とする主な魚種はフナ、ウグイ、ボラ、ナマズ、ブラックバスなど。季節によってはウシガエルの子（オタマジャクシ）が食される。また、冬季には開渠から温暖な水温を求め多くの魚が暗渠に集まる。ただし、日照がない上に湿度が高く、カビや大腸菌などの菌類が多く生息するため食料の保存は困難である。また、モヤシやキノコを主とする陰生植物の栽培も行われ、ビタミンやカリウム、食物繊維の摂取はこれによって行われる。

また、地下人たちは一定の年齢に達すると鬱症状を発現し、多くが自ら命を絶ってしまう。これは地上人の名残、地下順応の欠陥とも言えるもので、地上人が日照によって生成していたセロトニンが地下では生成できないためである。この代替として、集団での儀礼的な踊りが一日三度行われるが、それでも成人自死を免れることは難しいとされており、近年では地上世界から供給されるSSRI（選択的セロトニン再取り込み阻害薬）が珍重されている。地下世界における資産とはこのSSRIかあるいは塩のことであり、この所持量がそのまま貧富の差と言える。

・地政

北から順に、荒川水系、石神井川水系、神田川水系、渋谷川水系、目黒川水系、呑川水系、多摩川水系の7流域全ての地下に大小疎らな国がある。それぞれに自治が敷かれ、交易の手段は地上を介するものと、開渠を経て海を介するものに限られる。また、地上世界と地下世界の往来が可能なのは、地上におけるいわゆる路上生活者のみであり、彼らは地下世界における特権階級として扱われている。また、勃興して一世紀にも満たない地下世界が文明的急成長を遂げたのは、紛れもなく路上生活者たちによってもたらされた知恵のためである。

・^{ムカデ}百足型集合住居

地下の住人は百足型集合住居と呼ばれる横穴式のコンパウンドに暮らしている。これは穴暗人が考案したもので、中国の窖洞（ヤオトン）と路上生活者の技術を掛け合わせたものである。暗渠の岸はほとんどがコンクリートの護岸になっており、穴を穿つのは重労働である。そのため、劣化した裂け目があればそこから楔を打ち込むようにして掘り進める。（暗渠の

増水時に備え、この位置は高さが必要である)

風を通すためにこの開口部は二つ必要とされ、これがムカデの頭と尻にあたる。頭と尻を繋ぐ胴体部分は回廊となり、そこから足が伸びるように各家庭の住居ユニットが作られる。ユニット一つの大きさは幅4m・奥行き8m・高さ2～4mが標準であり、天井が高ければ高いほど湿気を分散させることができるため快適と言われる。

ユニット一つにつき3～4人の一家族が暮らし、一つは食料や道具を保存する倉庫に充てられる。排煙、排水が必要になる炊事場は回廊の暗渠側に敷設される。また、鶏や水生動物を飼育する家畜小屋は別の開口部に設けられている。

なお、地下住人のコンパウンド前の暗渠流水部にはペットボトルなどで製作された小型水車が多数取り付けられており、自転車ライトのダイナモと組み合わせてわずかな電力を得ている。この電気で住居内の照明と栽培用のLEDを灯している。

暗渠を流れる水を飲用水としては使用できず、付近の上水道管の劣化部から水道水を引くか、運良く雨水が浸透する箇所を掘り当てられればその浸潤水を飲用にする。

住居ユニットの床面は、ブルーシートを敷き、その上に砂を被せた2層構造になっている。これは床下から上がってくる湿気を防ぐためである。また、壁面は貝殻から焼成した石灰を塗った白壁（漆喰）が良いとされる。これは、反射効率の高い白色を用いることで部屋内を明るくし、さらに石灰が持つ吸湿、抗菌、防水力が必要だからである。なお、この数年新たに建設されたチカンチュの住居はこの限りでない。